The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 第１回臨床哲学フォーラム ： 「非人間・暴力・対話：関係性をめぐって」の特集にあたって |
| Author(s) | 小西, 真理子 |
| Citation | 臨床哲学ニューズレター. 2021, 3, p. 83-84 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/79251 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

特集４　第１回 臨床哲学フォーラム（ふるいにかけられる声を聴く）
テーマ：非人間・暴力・対話：関係性をめぐって

# 第１回 臨床哲学フォーラム
# 「非人間・暴力・対話：関係性をめぐって」の特集にあたって

小西　真理子

日時　：7 月 1 日（水）17:00～19:30
場所：大阪大学豊中キャンパス（CO デザインスタジオ　and　Zoom）
講師：小松原織香さん（日本学術振興会特別研究員 PD)

**【プログラム】**
17:00-17:10：趣旨説明・小松原織香さんの紹介（司会：小西真理子）
17:10-17:50：小松原さんの講演
17:50-18:00：院生コメント：鈴木萌花
18:00-18:10：院生コメント：徐彬原
18:10-18:20：院生コメント：桂ノ口結衣
18:20-18:40：休憩
18:40-19:00：小松原さん院生コメントへの応答
19:00-19:25：全体ディスカッション
19:25-19:30：閉会

臨床哲学研究室では、7 月 1 日（水）に第 1 回臨床哲学フォーラム（ふるいにかけられる声を聴く）「非人間・暴力・対話――関係性をめぐって」を開催し、日本学術振興会特別研究員 PD の小松原織香さんにご講演いただきました。本来でしたら研究室外の方にもご参加いただきたかったのですが、コロナ禍のため、Zoom 等を利用したオンライン開催イベントにおいて、「（自分は見られているにもかかわらず）見えない他者」が存在することに慣れていない方々もいらっしゃいました。そこで、このフォーラムはクローズドで行い、研究室関係者以外の方にかんしては、小松原さんや直接の関係者が、このフォーラムに特段に関心を示して下さりそうな方に個別に案内するかたちでご参加いただきました。そのような背景から、第 1 回臨床哲学フォーラムは、小松原織香さんに興味深いご講演内容やコメント等をいただいたにも関わらず、これまで公開できていませんでした。

小松原さんは修復的司法（正義）の研究を専門にされており、性暴力や環境問題などに取り組まれてきた方で、特に、聞き逃されがちな声に耳を傾け続けてこられた方だと思います。

近年は水俣病の研究にご尽力されており、その研究成果は論文としても公開されています。今回のフォーラムでは、小松原さんの当時の最新論考「野生の声を聴く――環境犯罪における修復的正義の構想」（2020『早稲田文学 2020 夏号』）を出発点としつつ、宮地尚子さんの「環状島」の話が展開されました。また、小松原さんのご論考・ご講演の事前原稿を受けて、臨床哲学研究室大学院生の鈴木萌花さん（認知症研究）、徐彬原さん（医療現場の暴力についての研究）、桂ノ口結衣さん（当事者の哲学への関心）が、ご自身の研究や関心と結びつけながら小松原さんに問いかけを行いました。本特集では、これらの内容もふくめ、質疑応答の模様も紹介しております。

小松原さんは、現場におもむきながら研究をされています。臨床哲学にも共通する「当事者の話を聴く」という視点をもつ小松原さんの水俣病研究のおもしろいところは、「野生／自然／環境」の声を、その声を聴いた人から聴く、という構図になっているところです。また、事前に小松原さんの論文を読んでいた院生・教員等から、小松原さんの執筆物から受ける印象と講演当日に実際に話されたときに受ける印象がかなり違うとの感想が出されたことも示唆的です。私自身、小松原さんの語り方には、正しい答えを出そうとするような展開からはどこか身をかわしながら、別の問いの本質へと迫っていき、そしてまた断定的な答えを軽やかにかわしていくなかで「何か」を描こうとするような不思議な魅力を感じています。

また、小松原さんはご講演で「現場に出る哲学者」に対する見解も述べられており、一見「ひとを対象としていない」研究をしていると思いこみがちな（あるいはその意識を忘れてしまいがちな）哲学のあり方とは異なる語り方を展開されています。これは哲学にかぎった話ではないのですが、「当事者」や「現場」とかかわる研究が増えてきている昨今、その際に問われるであろう意味での研究倫理の重要な点のひとつについて、小松原さんが語ってくださっていますので、以下、特段に引用させていただきたく思います。

> ［現場に出る哲学研究者になるにあたって、やっておくべきことは］自分自身の問題を把握しておくことです。マイノリティの問題を研究したい人は、たいてい自分の中になんらかの葛藤や当事者性を持っています。もちろん、私もそうです。そして、当事者に向き合って研究を進めていけば、自分自身の問題にも向き合うことになります。本当に辛いことです。なぜなら、自分の中の「傷つき」に触れていくからです。誰でもそうですが、自分の傷に触れると痛みでとり乱します。そのときに、他人を傷つけてしまうこともあります。でも、それは当事者に対して研究者が決してやってはいけないことです。調査対象者を振り回すことは、相手に暴力をふるうことです。その自覚をもとに、研究をスタートしなければなりません（小松原織香 2021「【講演】非人間・暴力・対話――関係性をめぐって」『臨床哲学ニューズレター』vol.3, p.92）。

このような研究者としての責任感に支えられてこそ、描かれる研究があると考えます。それでは、第 1 回臨床哲学フォーラムの雰囲気の一部をご覧ください。